

研究論文・25

動物用ワクチンや水銀・アルミナの ホメオパシーレメディーを使う ことによって動物の行動異常が 改善したケース

笹木眞理子*

1. はじめに

動物病院で子犬にワクチンを打ち続けていると、アトピーであったり外耳炎であったり、異常なほどの恐怖をもった犬になったりと、様々な病気がワクチンやその混合物と関連しているのではないかと、いうことを長年感じてきた。その疑問の1つである子犬の行動異常について検証したので報告する。

2. 目的

症状を引き起こすことができるものがその症状を治すことができるという同種の原理から成り立つホメオパシー療法¹⁾を使用して、ワクチンに含まれる水銀やアルミナなどのレメディー²⁾を使用し、子犬の行動異常の改善を図ることを目的とする。

3. 方法

1. 実施期間

2007年1月～2008年1月。

2. 犬の選択

- 1) ドッグトレーナーがしつけ指導をしても改善がみられず、行動異常がみられた子犬を選択。
- 2) 年齢は、小型・中型犬は1歳未満、大型犬は2歳

未満の子犬。

3) ホメオパシーの説明をして飼い主の承諾を得られた犬にホメオパシーのレメディーをおおよそ1～2カ月使用。

4) ホメオパシーのレメディーを使用している間、ドッグトレーナーのしつけトレーニングを受けることが可能な子犬。

3. 犬の種類

1) トイプードル4頭、ミニチュアダックスフント3頭、ヨークシャーテリア2頭、ジャックラッセルテリア、チワワ、シェパード、ゴールデンレトリバーなど。

2) オス11頭、メス9頭。

3) ペットショップで購入15頭、ブリーダーから直接購入5頭。

4) 混合ワクチンは20頭すべて接種。最低でも2回接種。狂犬病予防ワクチンは7頭接種。

4. 行動異常の分類

1) 急に切れる(吠える)：飼い主やドッグトレーナーの予測がつかないときに急に切れて吠える子犬。

2) 噛み付き：威嚇なしに突然噛み付いたり、興奮がエスカレートして噛み付いてしまう。

3) 理解遅い(集中困難)：しつけをしていてもすぐにほかのことに目が行ってしまい、食べ物を使っても集中

*笹木アニマルクリニック

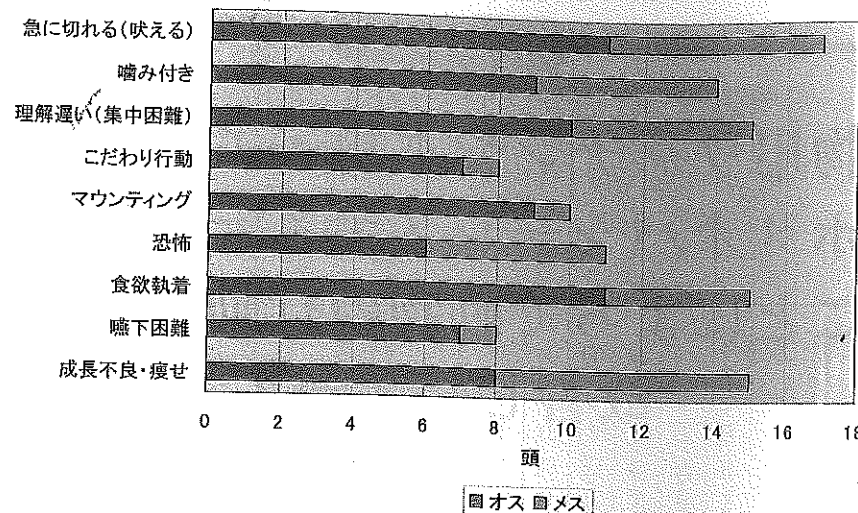


図1 レメディー使用前

できない。

4) こだわり行動：寝る前に必ずある場所を走り回る、必ず葉っぱだけは追いかけるなど、1つのものに異常なほど執着をみせる行動。

5) マウンティング：子犬時代に優位づけの行動の一部でマウンティング行動はみられるが、その行動があまりにも執拗で異常であると感じられたもの。

6) 恐怖：音や人や車などにおびえ、散歩も困難を来すもの。

7) 食欲執着：異常なほど食餌に執着をみせるもの。

8) 嚥下困難：顎の骨が弱いからか、咬む力があまりなく、食事に時間がかかるもの。

9) 成長不良・痩せ：成長が遅く、痩せているもの。

4 結果

1. レメディー使用前

20頭の中で、飼い主およびドッグトレーナーからみてそれぞれの行動に異常がみられた頭数をカウントする。全体的にオスの方に行動異常がみられることが多かった(図1)。

- 1) 急に切れる(吠える)：17頭
- 2) 噛み付き：14頭
- 3) 理解遅い(集中困難)：15頭
- 4) こだわり行動：8頭
- 5) マウンティング：10頭
- 6) 恐怖：11頭

7) 食欲執着：15頭

8) 嚥下困難：8頭

9) 成長不良・痩せ：15頭

2. 使用レメディー

1) すべての犬に使用したレメディー

Merc./Alum.(水銀/酸化アルミニウム), Psor.(疥癬), ワクチンレメディー(接種ワクチンによって選択)。

2) それぞれの犬の症状に合わせ使用した主なレメディー
Nux-v.(マチンシ), Verat.(バイケイソウ), Stram(チョウセンアサガオ), Bar-c.(炭酸バリウム), Calc.(炭酸カルシウム), Hyos.(ヒヨス), Tarent.(タランチュラ), Sanic.(サニキュラ鉱泉水)など。

3. レメディー使用後

ドッグトレーナーと飼い主が改善傾向を認めたが、まだ気になる症状が十分に改善していないと思われた頭数をカウントする(図2)。

1) 急に切れる(吠える)(3頭)：最初の頃よりずっとましにはなっているが残っているもの。

2) 噛み付き(2頭)：回数は減っているが残っているもの。

3) 理解遅い(集中困難)(0頭)：すべての個体でアイコンタクトとお座りなど基本的なことができるようになった。

4) こだわり行動(1頭)：集中できることによって、こだわりも減っていった。

5) マウンティング(1頭)：回数は減っているがまだ

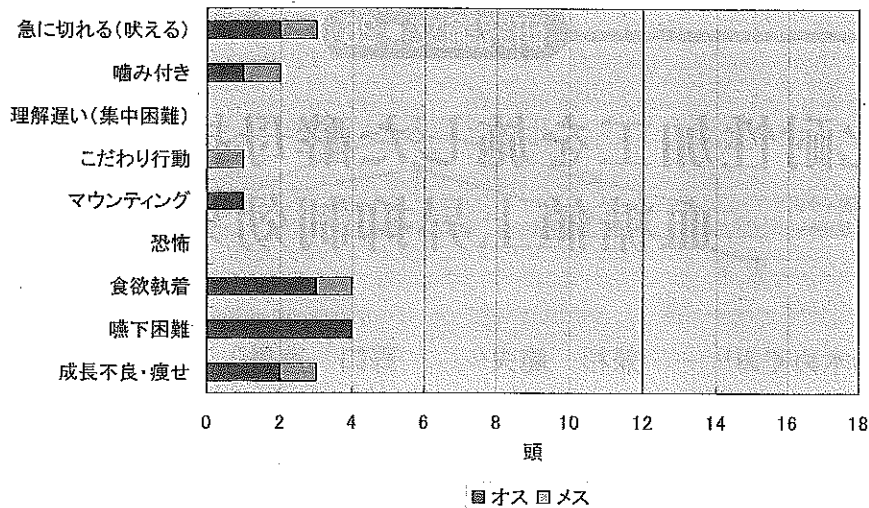


図2 レメディー使用后

みられる。

6) 恐怖(0頭)：すべての個体で恐怖の過剰部分は改善された。

7) 食欲執着(4頭)：飼い主が未だにすごく食べると言った子犬のみ。

8) 嚙下困難(4頭)：少しは改善したと思うが、まだ残っている子犬。

9) 成長不良・痩せ(3頭)：改善はしているが、もう少し時間が必要である。

5. 考察

今回レメディーを使用した子犬は、ドッグトレーナーがしつけすることが難しいと感じ、飼い主がお手上げ状態の子犬たちであった。子犬の症状を見続けて、犬にも人間同様な発達障害様行動がみられることに気づいたときは愕然とした。

子犬は、生後半年までに3～4回のワクチンが入り、年に1回ワクチンを打つことが推奨されている。

この子犬たちがワクチンのレメディー、Merc./Alum.のレメディーで行動異常が改善されるということは、ホメオパシーの同種療法という視点から考えると、ワクチンが影響を与えていることを示唆することになる。もちろん、ワクチンだけでなく子犬たちを取り巻く環境の影響も考慮しなければならないが、何世代にもわたってワクチンの影響を受けることによって、症状が出やすく

なっているのも事実かもしれない。また、犬ほど体重差のある動物は少なく(1kgの成犬から70kgの成犬：70倍)、それでもワクチンの投与量が同じであることも影響しているかもしれない。今回の子犬をみていると、人間同様²⁾オスの方が重症のケースが多く認められる。

犬は成長のスピードが速く、中型犬を人間の年齢に換算するとおおよそ生後3カ月で5歳、半年で9歳、1年で17歳となる。よって、行動異常のある子犬には人間の感覚より早くレメディー使用が必要であり、時期が早いほど改善も早く、飼い主と良い関係が得られるのではないかと考える。

今回はドッグトレーナーと一緒に観察することで、飼い主の偏った言葉に惑わされることなく犬たちの行動を客観的に判断できたことが、レメディー選択の助けになった。

今後は、種類別、年齢別など、もっと詳しく精査していきたいと考える。

文 献

- 1) サミュエル・ハーネマン：医術のオルガノン・第六版、ホメオパシー出版、東京、2007。
- 2) 由井寅子：ホメオパシー in Japan, pp. 20-21, ホメオパシー出版、東京、2002。
- 3) 由井寅子：発達障害へのホメオパシー的アプローチ, pp. 139-142, ホメオパシー出版、東京、2008。